

真理を伝える言葉

マタイによる福音書における譬えの文学的・神学的機能

原 口 尚 彰

1. はじめに

マタイ福音書の物語には、他の福音書に優って多くの譬え（マタ5:13, 14, 16）や譬え話が出て来る。その一部はマルコ資料や（マタ13:3-9=マコ4:3-9; マタ13:31-32=マコ4:30-31; マタ13:33=マコ4:32; マタ24:36-44=マコ13:32-37他）、Q資料から（マタ18:12-14=ルカ15:4-7; マタ18:12-14=ルカ15:4-7; マタ22:1-10=ルカ14:15-24; マタ24:45-51=ルカ12:41-48; マタ25:14-18=ルカ19:11-27他）、採用したものであるが、マタイ特殊資料や（マタ5:13-16; 13:24-30; 13:44; 13:45-46; 13:47-50; 20:1-16; 21:28-32; 25:1-13）、福音書記者の編集に（マタ2:6; 5:3; 13:24-30）由来するものも多い。

共観福音書に収録されているイエスの譬え話については、多くの新約学者による研究が積み重ねられて来た¹。しかし、彼らが主として関心を向けてきたのは個々の譬え話の分類と分析であり、福音書物語中の機能ではない²。また、文学的機能の点からすると物語性を持たない譬えと物語性を備えた譬え話の間に大きな差はないが、両者を切り離して、譬え話だけを独立のジャンルとして考察する傾向が強い³。

1 例えば、Adolf Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu* (zwei Teile; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1910); C. H. Dodd, *The Parables of the Kingdom* (New York: Charles Scribner's Sons, 1936); Joachim Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu* (3. durchgesehene Auflage; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1954); A. M. Hunter, *Interpreting the Parables* (London: SCM, 1960); Hans Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, FRLANT 120 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978); Eta Linnemann, *Gleichnisse Jesu* (2. Auflage der Kurzausgabe; Vandenhoeck & Ruprecht, 1982); Charles W. Hedrick, *Parables as Poetic Fictions: The Creative Voice of Jesus* (Peabody, MA: Hendrickson, 1994); Wolfgang Harnisch, *Die Gleichniserzählungen Jesu* (3. unveränderte Auflage; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1995); Aaland J. Hultgren, *The Parables of Jesus: A Commentary* (Grand Rapids: Eerdmans, 2000); Klyne Snodgrass, *Stories with Intent: A Comprehensive Guide to the Parables of Jesus* (Grand Rapids: Eerdmans, 2008); Ruben Zimmermann ed., *Die Hermeneutik der Gleichnisse Jesu*, WUNT 231 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2008); Luise Schottroff, *Die Gleichnisse Jesu* (Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 2015) を参照。

2 例外が、John R. Donahue, S.J., *The Gospel in Parable* (Minneapolis: Fortress, 1988), 63-125; Ulrich Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, EKK 1/1-4 (4 Teile: 5. völlig durchgesehene Aufl.; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 2002), 2:366-378である。

3 例外が、両者を一括して扱う Paul Ricoeur, "Biblische Hermeneutik," in Wolfgang Harnisch ed., *Die neutestamentliche Gleichnisforschung im Horizont von Hermeneutik und Literaturwissenschaft* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 311-312; Ruben Zimmermann ed., *Kompendium der Gleichnisse Jesu* (2. korrigierte und um Literatur ergänzte Auflage; Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 2015) の立場である。

本論考はマタイ福音書の譬えの積義的・神学的考察である。特に、マタイ固有の譬えや編集作業に着目して、マタイの譬えの用い方の特色を明らかにした上で、それぞれの持つ文学的機能と神学的特色について考察する。最後にまとめとして、マタイ福音書全体の中で譬えを通して語ることが持つ文学的・神学的意義について考察する。

2. 譬えと譬え話

積義的・神学的研究の前提として、譬えという文学形式についての基本的なことを確認しておきたい。譬えはあることを異なった事柄になぞらえる文学形式である⁴。譬えは聞く者の理解を助け、メッセージを強く印象付ける効果を狙っている。文学的機能からすると譬えは連想によって新たな意味を創り出して新しい現実認識をもたらす⁵。

言葉による説得の技術である修辞学は、修辞技術の一つとしての譬えを評価している⁶。修辞学によれば、譬えとはある事物を他の事物に置き換えて表現することである（アリストテレス『弁論術』1405a;クウィンティリアヌス『弁論家の教育』8.6.1）⁷。修辞学は譬えを論証手段である例証の一つに位置付けている（アリストテレス『弁論術』1393a-b）⁸。但し、譬えは間接的な言い方であり、それが何を象徴しているかということについては複数の解釈が成り立つ余地がある⁹。

譬えはメタファーとして短い諺や警句の形でも用いることが出来る。比喩 (simile, similitude) は「・・・のような」といった比較の言葉を伴うが、メタファー (metaphor) はそのような句を伴っていない。ただし、ある事物を他の事物に置き換えて表現するという性格は、比較の言葉が明示されるどうかを問わ

4 OED 11:177; Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:70; Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 16; Robert Funk, “Das Gleichnis als Metapher,” in Wolfgang Harnisch ed., *Die neutestamentliche Gleichnisforschung im Horizont von Hermeneutik und Literaturwissenschaft* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 20; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 3.

5 Funk, “Das Gleichnis als Metapher,” 29-31, 33; Ricoeur, “Biblische Hermeneutik,” 283, 288, 294-295, 314; Eberhard Jüngel, “Das Evangelium als analoge Rede von Gott,” in Wolfgang Harnisch ed., *Die neutestamentliche Gleichnisforschung im Horizont von Hermeneutik und Literaturwissenschaft* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 355-356; Gerhard Sellin, “Allegorie und ‘Gleichnis’,” in Wolfgang Harnisch ed., *Die neutestamentliche Gleichnisforschung im Horizont von Hermeneutik und Literaturwissenschaft* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 374-374, 408-409.

6 Ricoeur, “Biblische Hermeneutik,” 283-284.

7 Heinrich Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik* (4. Aufl.; Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2008), § 843.

8 Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik*, § 422-425; Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:70,73を参照。尚、Wolfgang Harnisch, “Die Sprachkraft der Analogie,” in Wolfgang Harnisch ed., *Die Gleichnisse Jesu* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1982), 390-413（特に、396, 398, 408-409）は喩えの機能は類比に基づいた例示であって論証ではないとするが、喩えは置かれた文脈より論証的性格を帯びることがある。

9 Funk, “Das Gleichnis als Metapher,” 22, 29, 33; Hedrick, *Parables as Poetic Fictions*, 4; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 8.

10 Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik*, § 286; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 60.

ず存在しており、比喩とメタファーは修辭的機能において大きな違いはない（アリストテレス『弁論術』1406b）¹⁰。

譬え話（parabole）はストーリー性を備えた譬えであり、マタイ福音書においては、パラボレー（παραβολή）と呼ばれる（マタ13:3, 10, 13, 18, 24, 31, 33, 34, 35, 36, 53; 15:15; 21:33, 45; 22:1; 24:32）¹¹。パラボレーはあることを異なった事柄に譬える文学形式であり、未知のことを既知のものに対比し、不可視的なことを可視的なことに置き換えて修辭的効果を挙げることを目的とする。マタイ福音書は他の福音書にも増して「天国は・・・に似ている」という定型句や（マタ13:31, 33, 44, 47, 52; 20:1）、「天国は・・・に比べられる」という定型句で（マタ13:24; 18:23; 22:2; 25:1）譬え話を導入することが多い¹²。このことは福音書記者マタイが譬えの本質を類似に基づいた比較に見ていることと、その主題が天国の到来のメタファーであると理解していることを示唆している。尚、文体の点からすると、「幸いの宣言」（5:3-12）、「反対命題」（5:21-48）、「ファリサイ派・律法学者批判」（23:13-33）に見られるように、マタイは典禮的な文体感覚を持ち、定型的な表現を重ねて用いる傾向がある。

3. マタイ福音書における譬え

3.1 叙述文中の譬え

マタイ福音書冒頭の降誕物語の叙述部分には随所に旧約預言が引用されている（マタ1:23=イザ7:14; マタ2:6=ミカ1:1, 23; マタ2:18=エレ31:15; 創35:19）。それはマタイがイエスの誕生の出来事を預言の成就と考えているからであり（マタ1:22を参照）、旧約引用を通してイエスがイスラエルを救うメシアであることを示そうとしている。マタ2:6はミカ書5章からの引用であるが（ミカ5:1, 3）、その中に「我が民イスラエルを牧する者」という表現が出て来る。旧約聖書にはイスラエルの指導者を「羊飼いに」、その統治を「羊を飼うこと」に譬える伝統があったので（詩78:70-72; イザ63:11; エゼ34:2-5; 37:24を参照）、ミカの預言はイエスが「油注がれた」王としてダビデ王の出身地であるベツレヘムに生まれることを示唆している。譬えは象徴性の強い言語表現として詩文との親和性が強く、詩作に用いられる非日常的語法の一つとされる（アリストテレス『詩学』1457a-1459; 『弁論術』1406bを参照）¹³。旧約預言は詩文であり、メタファーが沢山使用されている。マタイはメシア預言を示すメタファーを引用して、イエスの誕生の意味を読者の脳裏に焼き付けている。

マタ3:3は、イザヤ書40章からの引用を通して、洗礼者ヨハネを「荒野で呼ばわる者の声」に、その職務を「主の道を備える」ことに譬えているが（イザ40:3）、これらの譬えは既にマル1:2-3に引用されており、マタイはそれをそのまま引き継いでいるに過ぎない。

マタイ福音書3章以降は成人したイエスの生涯を描いている。ヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受けた後（マタ3:13-17）、40日の間荒野でサタンの誘惑を受けて退けた後に（マタ4:1-11）、ガリラヤに帰っ

11 この名詞の語学的分析については、Bauer-Aland, 1238-1239; *TWNT* 5:741-749; *EWNT* 3:35-38; Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 1:25-33を参照。

12 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 121, n.117; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 2:367-368.

13 Ricoeur, "Biblische Hermeneutik," 316.

て天国の到来の福音を語る活動を始める (4:12-17)。イエスのガリラヤ宣教の開始をマタイはイザヤの預言の成就と考えた。マタ4:16-17はイザ8:23-9:1を引用するが、4:16には「暗闇に輝く光」という譬えが出て来る (イザ9:1)。イザヤ書の本来の文脈では、この暗闇とはアッシリア帝国の支配下にある世界のことであり、光とはその支配を打ち破ってイスラエルの主権を回復するメシアのことを指している。マタイはその指示対象を同時代に移して、かつて「異邦人のガリラヤ」と呼ばれた地において宣教活動を始めたイエスの姿に世界に光をもたらすメシアの姿を重ねている¹⁴。この場合の「光」はイザヤの預言のような政治的な主権の回復ではなく、罪からの救いの希望を象徴しているのであろう。マタイは先に読者に対してイエスという名の意味は「自分の民を罪から救う」ことを意味していると述べている (マタ1:20)。マタイは旧約聖書の譬えをキリスト論的な視点から再解釈して、指示対象を大胆に転換している。

3.2 登場人物の発言中の譬え

a. 洗礼者が用いる譬え

マタイ福音書ではイエスだけではなく、洗礼者ヨハネも、譬えを用いて人々に語り掛けている。マタ3:7-12において、洗礼者は説教の中で、「蝮の子ら」(3:7)、「悔い改めに相応しい実を結ぶ」(3:8, 11)、「脱穀と焼却」(3:12)等の譬えを用いている。この箇所にはルカ福音書に並行箇所があるので (ルカ3:7-9)、Q資料に由来する語録であることは明らかである。「蝮の子ら」(マタ3:7)は洗礼を受けようとしてやって来たファリサイ派やサドカイ派の人々を指して用いられた極めて否定的な表現である。「悔い改めに相応しい実を結ぶ」こととは (3:8, 11)、罪を告白して洗礼を受けた者が、悔い改めに相応しい倫理的振る舞いをするを指している。倫理的振る舞いを木が実を結ぶことに譬えることは、教訓詩の一つである詩編1編に見られるので (詩1:3)、旧約聖書に親しんでいる読者には説明する必要のない表現であった。「良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ」という譬えを、後にイエスが弟子たちとガリラヤの民衆に語りかけた山上の説教の中で用いることになる (マタ7:19)。

「斧が根元に置かれている。良い実を結ばない木は切り倒されて火に投げ込まれる」(3:10)という譬えはQ資料に由来するが (ルカ3:9)、終末の裁きをリアルに描く効果を持っており (イザ10:33)、洗礼者が裁きの接近を説いて民に悔い改めを勧める預言者であることを示している¹⁵。

「脱穀と焼却」(マタ3:12)の譬えもQ資料に由来する (ルカ3:17を参照)。穀物を収穫した後、脱穀し、残った籾殻を火にくべることは、旧約聖書の預言において裁きの象徴的表現になっていた (ダニ2:35; ホセ13:3を参照)¹⁶。マタイ福音書において「火」は、しばしば裁きの譬えとして用いられている (3:10;

14 Donald A. Hagner, *Matthew*, WBC 33A-B (2 vols; Dallas: Word, 1993-95), 1:74; W. D. Davies /Dale C. Allison, *The Gospel according to Saint Matthew*, ICC (3 vols; Edinburgh: T. & T. Clark, 1988-1997), 1:386; Grant R. Osborne, *Matthew*, ZECNT 1 (Grand Rapids: Zondervan, 2010), 143.

15 Joachim Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, HTKNT 1/1-2 (2 Bde; Freiburg: Herder, 1986-1988), 1:70; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 1:205.

16 Osborne, *Matthew*, 116.

5:22; 7:19; 13:40, 42, 50; 18:8, 9; 25:41)。「箕を手を持って脱穀場をくまなく清め、穀物を集めて倉に収め、
 粉穀を消えることのない火で焼く」という句は、メシアが行う終末の裁きを、収穫した粉を脱穀して穀
 物を集める農作業に譬えており、聞く者に終末の裁きの恐ろしさをリアルに感じさせる効果がある¹⁷。

b. イエスが用いる譬え

マタイ福音書において、イエスは他の福音書にも増して譬えを用いて語っている。マタ4:19において
 イエスは漁師であるシモンとアンデレに対して、「私に従って来なさい。あなた方を人間を獲る漁師に
 してあげよう」と語っているが、この譬えはマルコ福音書が伝えるイエスの言葉をそのまま再録してい
 るに過ぎない(マコ1:17を参照)。

これに対して、マタイが山上の説教に収録したイエスの言葉には、マタイ特有の譬えが見られる。山
 上の説教冒頭にはマカリズム(幸いの宣言)が置かれている(マタ5:3-12)。この語録は基本的にはQ資
 料から採用されているが(ルカ6:20-23を参照)、マタイが加えた編集によって、元々は直接的な表現が
 譬えに転化する現象が観察される、貧しい者の幸いを語るマカリズムにマタイは「霊において」とい
 う句を付け加えた(マタ5:3 とルカ6:20を参照)。ルカが伝えるマカリズムは文字通り経済的に貧しい者の
 幸いを語っている(ルカ6:20)。しかし、「霊において貧しい」という句になると、「貧しさ」の内容が
 精神化・倫理化され、神の前に自らを低くする敬虔さを指す譬えとなる¹⁸。このように貧しさを敬虔さ
 の象徴として用いることは詩編や(詩14:6; 37:11; 86:1; 109:22)死海写本に見られる(『感謝の詩編』6:3;
 14:3; 『戦いの書』14:7)¹⁹。マタイ福音書の読者には理解が容易な譬えであった。

他方、マタイは「飢え渴く」という句の前に「義」という句を付け加えて、「義に飢え渴く」として
 いる(5:6)。このマカリズムは元々は文字通り食べる物や水がなく飢え渴いている者が満たされること
 を幸いと語っているが(ルカ6:21)、マタイは「義に」という言葉を加えることによって、飢えが正義
 を求める精神的渴望を指す譬えに転化している²⁰。

山上の説教において、イエスは弟子たちが「地の塩」(マタ5:13)、「世の光」(5:14, 16)であると宣言
 している。これらの譬えは共観福音書には並行箇所はなく、マタイ特殊資料に由来する語録である。こ
 れらはイエスを信じる者が社会の中で果たす機能を塩や光といった身近な物質や物理現象に譬えてい
 る。これらは直説法現在形で書かれており、事実を述べる文章形式を取っているが、特に弟子たちに向
 けられた言葉であり、そのような存在であるようにという勧告的意味が存在している²¹。

「天に富を積む譬え」は(マタ6:19-21)、富を得るために奮闘するよりも、神の御心に従った生活を続

17 Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 1:72.

18 Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 1:120-122; Davies / Allison, *Saint Matthew*, 1:443-444; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 1:278-279; Matthias Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, NTD 1 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2015), 68.

19 Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 1:278-279.

20 Davies / Allison, *Saint Matthew*, 1:451-452; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 1:283-284.

21 Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 1:300; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 72-73.

けることを勧めている。この譬えはルカ12:33にも出て来ており、Q資料に由来する。「天に富を積む」ことが神の御心に従った生活をするためのメタファーになることは初期ユダヤ教文献の倫理的勧告にもあるので（トビ4:9; IVエズ6:5; シラ29:10-13）、マタイ福音書の読者には問題なく理解されたと考えられる²²。

「体の灯りの譬え」（マタ6:22-23）にはルカ11:34-35に並行箇所があり、Q資料に由来する語録であることが分かる。「目は体の灯りである」という言葉は、当時のユダヤ人社会で流布した格言のようであるが（箴15:30; トビ10:5; 11:14を参照）、目という器官が体の中で視覚を受け持っていることから、体全体を明るくする「灯り」と同視されている（ダニ10:6を参照）。Qが伝える語録はこの章句を倫理的勧告として使用しているが、目を物事の善し悪しを認識する能力を指すメタファーとして用いている²³。マタイ7章には譬えが次々に出て来る。「目の中の梁の譬え」（7:3-5）はルカ6:41-42に並行箇所があり、Q資料に由来することを示している。「目の中の梁」は誇張した表現を用いて人間が自分自身の過ちに気付きにくい傾向を指摘している²⁴。

「狭い門から入る譬え」（7:13-14）には、ルカ13:24に並行箇所があり、Q資料から採られた言葉であることを示している。マタイ版の語録はいのちに到る道に続く狭い門から入ることと、滅びに到る道に続く広い門から入ることに対比して、聞く者に狭い門から入るように勧めている。二つの対照的な行動の可能性を示してその片方を選択するように迫ることは、知恵文学によく見られる語り方である（申11:26-32; 30:15-20; 箴2:7-15; 2:21-22; 28:6-12; 知5:1-8を参照）。この語録が山上の説教の中に置かれたことにより、「狭い門から入る」ことはイエスの教えに従って生きることを、「広い門から入る」ことは、ファリサイ派や律法学者たちの教えに従って生きることを象徴することになる²⁵。

マタ7:17-18の「良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ譬え」はQ資料から採られており、ルカ6:43-45に並行箇所がある。この譬えは、倫理的行動を結実に譬える旧約聖書の文学的伝統に立っており（詩1:3）、良いことをすることを勧める倫理的勧告である。マタイはこの譬えを、「羊の皮をまとった狼」に譬えられる偽預言者を警戒するように勧める言葉に結び付けており、倫理性の表れである振る舞いを本物の預言者と偽預言者を見分ける基準としている（マタ7:15-16）。ここでは良い木は本物の預言者であることを、悪い木とは偽物の預言者であることを語るメタファーとなっている²⁶。

「岩の上に家を建てる譬え」も（7:24-27）Q資料に由来する（ルカ6:47-49）。マタイはこの譬えを知恵

22 Hagner, *Matthew*, 1:157-158; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 1:464-465; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 112.

23 Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 1:242; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 1:466; Hans Dieter Betz, *The Sermon on the Mount*, Hermeneia (Minneapolis: Fortress, 1995), 433-435; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 112.

24 Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 1:257; Betz, *The Sermon on the Mount*, 492; Hagner, *Matthew*, 1:169; Osborne, *Matthew*, 258.

25 Hagner, *Matthew*, 1:179-180; Davies / Allison, *Saint Matthew*, 1:699; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 1:519; Betz, *The Sermon on the Mount*, 523.

26 Betz, *The Sermon on the Mount*, 536-537; Osborne, *Matthew*, 272; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 126-127.

文学的に岩の上に家を建てる賢い者と、砂地に家を建てる愚か者と対照し、賢い者となることを勧める勧めとしている。マタイ自身がこの譬えの意味を解説しており、賢い者はイエスの教えを聞いて実践する者のことを、愚かな者とは聞いても実践しない者を指している（マタ7:24, 26）。この譬えは山上の説教（5:3-7:27）の結びに位置しており、説教を聞いた者に実践することを促している²⁷。

「花婿と婚礼の客」（マタ9:15）と「新しい布切れ」（9:16）と「新しい葡萄酒」（9:17）の譬えは、福音に生きる者の生活態度が、旧来のユダヤ教の敬虔とは異なることを示す譬えであるが、すべてマルコ原本から採用されており（マコ2:18-22を参照）、特にマタイ的な特色を示してはいない。

「天国のことを学んだ律法学者の譬え」は、マタイ福音書13章に収録されている譬え話による説教（13:3-52）の結びの言葉の中に出て来る（13:52）。この譬えは異なった物の間の比較の要素を含んでいても物語性が少ないので、譬え話よりも比喩に分類できる。マタイ共同体の中には「天国について学ぶ律法学者」（13:52）と呼ばれる指導者たちがいた。彼らは回心以前はユダヤの律法について学ぶ者であったが、キリストの福音を信じるようになってからは、天国における救いについて探求する者となった。彼らは「自分の倉から新しいものと古いものを取り出す主人」に譬えられている。「新しいもの」とはイエスによって啓示された新しい教えであり、「古いもの」とは旧約聖書に示されている古い契約についての知識のことであろう²⁸。

4. マタイ福音書における譬え話

マタイ福音書における譬え話は、13章（マタ13:3-9, 24-30, 31-32, 33, 44, 45-46, 47-50）と24章（24:36-44, 45-51）と25章（25:1-13, 14-30, 31-46）に集中して出て来るが、他の章にも散見される（20:1-16; 21:28-32, 33-41; 22:1-14）。マタイ福音書13章は7つの譬え話を収録しており、譬え話の章となっている。この章はマルコ福音書より継承した一連の譬え話に加えて（マタ13:3-9=マコ4:3-9; マタ13:31-32=マコ4:30-31; マタ13:33=マコ4:32）、マタイ特殊資料（マタ13:24-30; 13:44; 13:45-46; 13:47-50）から採録した譬え話を付け加えて拡充している。ここでは、主としてマタイの編集句やマタイ特殊資料から採用した譬え話の特色について考察することとする。マタイ13章の譬え話はガリラヤ湖に浮かべた舟から湖岸に立つ民衆に向かって語られたという設定になっている。マタイはマルコ原本に従って（マコ4:3-9, 10-12, 13-20）、種蒔きの譬え話とその解釈をイエスの教えの冒頭に置いている（マタ13:3-9, 10-17, 18-23）。譬えで語る理由付けの部分は拡充されており、イザヤ書6章の頑迷預言はイザヤ書本文を七十人訳に従ってより正確に引用されている（マタ13:14-15とマコ4:12をイザ6:9-10に比較せよ）。マタイはまたマルコ原本にはなかった、「幸いだ、あなた方の目は見ており、あなた方の耳は聞いているのだから。アーメン、私はあなた方に告げる。多くの預言者や義人は、あなた方が見ているものを見たいと願うが見ることがなく、あなた方が聞いていることを聞きたいと願っていたが、聞くことがなかったのである」という文章を付

27 Betz, *The Sermon on the Mount*, 557; Hagner, *Matthew*, 1:191-192; Davies / Allison, *Saint Matthew*, 1:719; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 133-135; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 129-130を参照。

28 Hagner, *Matthew*, 1:402; Osborne, *Matthew*, 545.

け加えている（マタ13:17）。弟子たちが見ているものとは具体的にはイエスのなす癒しの業であり、聞いているものとは譬えによって語られたイエスの教えであろう²⁹。天国の秘儀が開示されている弟子たちは、イザヤの頑迷預言にも拘わらず、イエスの譬えによる教えを聞いて理解する立場に置かれていることを幸いとしている。

マタ13:24-30の「毒麦の譬え話」は、「種蒔きの譬え話」（13:3-9）をモデルにして作成された譬えの変種であり、マタイ特殊資料に由来する³⁰。この譬え話は家の中で弟子たちだけに語られている設定になっている（13:36）。この譬え話に種播く人が登場して良い畑に種を播く（13:24）。しかし、彼の就寝中に敵がやって来て同じところに毒麦の種を播く（13:25）。種が芽を出すと麦だけでなく、毒麦も現れて来た（13:26）。僕たちがこのこと報告し、相談すると主人は毒麦を抜こうとして麦まで抜いてしまうおそれがあるから、刈り入れの時まで待って、毒麦を集めて焼くように指示した（13:27-30）。マタ13:36-43は13:18-23に倣って譬えのアレゴリカルな解釈を与えている。この解釈によれば、種を播く者は人の子であるキリストを、畑は世界を、種は御国の子らを、毒麦は悪しき者＝悪魔の子らを、刈り入れは世の終わりを、毒麦を焼くことは終末の裁きを象徴する（13:37-38）。毒麦の譬えとその解釈は、洗礼を受けて信徒となった者の中にも後に棄教したり、福音に反することをを行うようになる者がある事実を前提にしている。そのような者を探し出して追放しようとすることは、真つ当な信徒までも追い出してしまう危険があるので、終末時に天使たちによって行われる裁きに委ねることを勧めることがこの譬え話のメッセージであろう（Iコリ4:5を参照）³¹。自然な農耕の場面を描いて神の国の到来を描く「種蒔きの譬え話」（13:3-9）に対して、この毒麦の譬えには、超自然的な勢力である悪魔が登場して夜に種蒔きを行っているし、刈り入れに象徴される終末の裁きを人の子が超自然的存在である天使を使わして行うこととしているので、黙示文学的な色彩が非常に強くなっている³²。

「畑の宝の譬え話」（13:44）と「良い真珠の譬え話」（13:45-46）と「漁獲の譬え話」（13:47-50）については共観福音書に並行例はなく、マタイ特殊資料より採用されたものである³³。「天国は・・・に似ている」という導入句は（13:44, 45, 47）マタイが好んで用いる定型句であり（13:52; 20:1を参照）、編集句であろう³⁴。「畑の宝の譬え話」において、ある人が畑に宝が隠されていることを発見すれば、大喜びで全財産を売ってその畑を買うことになる（13:44）。「良い真珠の譬え話」では、商人が良い真珠を探し出せば、全財産を売ってその真珠を買うこととなる（13:45-46）。これらの譬えにおいて、「畑の宝」や（13:44）と「良い真珠」（13:45-46）は天国に入ることを表している。福音に聞き従って天国に入ることが、すべてに優る価値があることを強調しているのは明らかである³⁵。

29 Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 2:314-315; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 214.

30 Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu*, 2:562-63; Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 1:489; Hagner, *Matthew*, 1:382.

31 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 183; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 127.

32 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 185; Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 1:503; Hagner, *Matthew*, 1:393-394; Donahue, S.J., *The Gospel in Parable*, 68.

33 但し、「畑の宝の喩え」（13:44）と「良い真珠の喩え」（13:45-46）については、外典のトマス福音書の語録76と109が遠い並行伝承を提示している。

34 Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus* (4. Aufl.; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1972), 142.

「漁獲の譬え話」(13:47-50)では終末の裁きが漁獲後に行われる魚の選別に譬えられている³⁶。漁師が網を打って魚を捕らえて岸に引き上げる。網の中に入った魚は市場価値があるものも価値がないものもあるので、価値あるものだけを選んで器に入れるが、価値がないものは捨ててしまう。同様に、世の終わりには天使たちがやって来て、義人と悪しき者たちをより分け、悪い者は燃えさかる炉に投げ込んでしまうことになる。この譬え話は、マタイ共同体によって作られ、伝えられた言葉であろう³⁷。この譬え話は天使を通しての終末の裁きを主題にしており、「毒麦の譬え」(13:24-30)と同様に黙示的性格が強い。

マタイ福音書18章は教会員たちの霊的世話を主題としており、教会の指導者たちに向けた一連の言葉が記されている。マタ18:12-14に「迷った羊の譬え話」が引用されているが、この箇所にはルカ15:3-7に並行箇所があり(トマ福107にも遠い並行箇所がある)、Q資料から採用されていることが分かる³⁸。マタイ版の話は「あなたがたはどう考えるのだろうか?」という聞く者の注意を喚起する問いによって導入される(マタ18:12a)。共観福音書では問い掛けが譬え話の導入句となり、読者に考えることを要求するような事例が多く見られる(マタ12:11; 18:12; 21:28; 24:45; マコ4:31; ルカ11:5, 11, 18; 14:28; 15:8; 17:7)。ある羊飼いが羊を100匹飼っていて放牧中に1匹が迷ってしまった時に、迷っていない99匹を山に残して迷った1匹を探し出し、他の99匹に優ってその1匹が見つかったことを喜ぶ(マタ18:12b-13)。結びの句(18:14)はマタイによって付加された解釈句である。

旧約聖書においては神が羊飼いに、イスラエルの民が羊の群れに譬えられることが多い(詩23:1-6; 74:1; 77:21; 78:52; 79:13; 80:2; 95:7; 100:3; 119:176; イザ40:11; 53:6; エレ23:1-4; エゼ34:11-31)。神は羊の世話をし、羊を導いて牧草や泉へと連れて行く(詩23:1-6; 78:52; 100:3; イザ40:11; 49:9-10; 53:6; エレ23:1-4)。羊は迷い易く(詩119:176; イザ53:6; エレ23:4)、神は散り散りになった羊を探し出し、連れ戻す(エゼ34:11-31)³⁹。

マタイ18章の文脈では、この譬え話の前後に会員が罪を犯すことを主題とする語録が置かれているので(マタ18:6-9, 15-20を参照)、この譬え話において神が羊の飼い主に、信徒が羊に譬えられており、羊が迷うことは信徒が罪を犯すことのメタファーとなっていると考えられる(詩119:176; イザ53:6を参照)⁴⁰。この解釈によると、「迷った羊」の譬えは、罪を犯して迷い出た信徒を探し求める神の愛を語っ

35 Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 143; Jüngel, *Paulus und Jesus*, 144; Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 1:507; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 141; Hedrick, *Parables as Poetic Fictions*, 119-120; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 413; Hagner, *Matthew*, 1:397; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 2:353-354; Osborne, *Matthew*, 541; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 225を参照。

36 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 146; Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 1:510; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 305-307; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 2:360を参照。

37 Jüngel, *Paulus und Jesus*, 148; Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 1:512.

38 Hagner, *Matthew*, 2:525-526; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:25-26; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 287; 山田耕太『Q文書 訳文とテキスト・注解・修辞学的研究』教文館、2018年、279-281頁を参照。

39 Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:27.

40 Hagner, *Matthew*, 2:527; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 54-55を参照。

41 Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 2:133.

ていることになる（マタ18:14）⁴¹。この譬え話はマタイ共同体の指導者たちに、罪を犯して迷い出た信徒を見つけ出して教会の交わりに連れ戻す努力をするように勧めている⁴²。

「仲間を赦さない家来の譬え話」（18:23-35）は、マタイ固有の譬え話で、マタイ特殊資料に由来する。この譬え話は、兄弟を赦す限度に関する弟子のペトロとイエスの対話に続いて記されており、「7の70倍赦す」ように勧めるイエスの言葉の説明として語られているので（18:21-22を参照）、ルカ福音書に見られる例話に近い機能を果たしている（例えば、ルカ10:25-36を参照）。話は、「天国は次のような王に譬えられる」という導入句で始まる（18:23）。ある王が家来に貸した金の決算をする時に、1万タラントンを借りている家来に対して憐れに思って負債を赦し、借金を棒引きにする（18:23-25）。しかし、この家来は後に自分に100デナリオンの借金をしている仲間に苛酷な取り立てを試み、返済することの出来ない者を牢に入れてしまった（18:26-30）。家来の仲間の報告を受けた王は怒って、この家来を呼び付けて借金を返すまで牢に入れてしまった（18:31-34）。その理由は、王が自分を憐れんだように、この家来も自分の仲間を憐れまなければならなかったのにそうしなかったということである（18:33）。最後に解釈句が置かれており、「あなた方のめいめいが自分の兄弟を心から赦さないならば、私の天の父も同様になさるであろう」と宣言している（18:35）。この解釈句は譬え話が、王に擬されている天の父なる神から罪を赦されている者として、信仰の兄弟が自分に対して犯した罪を赦すように勧める言葉であることを示しており、福音書記者マタイの理解を端的に示している（シラ28:1-7; マタ6:12, 14-15を参照）⁴³。

「葡萄園の労働者の譬え話」（20:1-16）は、マタイ福音書独自の譬え話であり、他の福音書に並行箇所はない。20:16は後に追加された編集句であり（マタ19:30を参照）、本来の譬え話は20:1-15の部分である⁴⁴。葡萄園の主人がいて葡萄園で働く日雇いの労働者をアゴラで雇う。ある者は夜明けに、ある者は第三刻（午前9時）に、ある者は第六刻（12時）に、ある者は第九刻（午後3時）に、ある者は第十一刻（午後5時）に雇って葡萄園に送って働かせた。夕方になり、一日の労賃を払う時になると、主人は実際に働いた時間に関わりなく、一律に1デナリを払った。長い時間働いた者たちが不平を言うと、主人は皆に等しく1デナリ払うことを約束したことを根拠にクレームを斥けた（20:13-15）。この話は労働の対価の支払いとしては一見不公平で非合理的な印象を与えるが、対価は労働時間によって定められていないので、当初の約束には忠実である。この譬えにおいて賃金は神が与える救いの象徴となっている⁴⁵。天国における救いは、どれだけの時間信徒として神に仕えたかということとは無関係に信じる者

42 Hultgren, *The Parables of Jesus*, 56; Linnemann, *Gleichnisse Jesu*, 103; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:28-29; Osborne, *Matthew*, 682; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 287-288を参照。

43 Linnemann, *Gleichnisse Jesu*, 105; Gnilka, *Das Matthäusevangelium*, 2:148; Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 253-254; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:74-76; Osborne, *Matthew*, 697.

44 Jüngel, *Paulus und Jesus*, 164; Linnemann, *Gleichnisse Jesu*, 83; Gnilka, *Das Matthäusevangelium*, 2:148; Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 177; Moisés Mayordomo, “Das Gleichnis von den Arbeitern im Weinberg als ‘Ereignis der Güte Gottes’,” in Jörg Frey / Esther Marie Jonas eds., *Gleichnisse verstehen. Ein Gespräch mit Hans Weder*, BTS 175 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2018), 110, 113.

45 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 122; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 310; Mayordomo, “Das Gleichnis von den Arbeitern im Weinberg,” 110, 117-118.

に与えられる。若いときから信徒として生活している者も、人生の終わり近くに回心して信徒となるものも、与えられる救いは全く同じであることを示している。この譬え話は逆説的な形で救いが恵みとして与えられるのであり、功績に対する対価として与えられるのではないということを語っている⁴⁶。

「二人の息子の譬え話」(21:28-32)もマタイ特殊資料から採られた独自の譬え話である。この譬え話はエルサレムの神殿の庭で祭司長や民の長老たちに対して語られ、「あなた方はどのように考えるだろうか?」という問い掛けから始まっている(21:28を参照)。この譬え話は少し後に出て来る「葡萄園の主人と小作の農夫たちの譬え話」(21:33-46)と同様に、ユダヤ人指導者たちへの強い批判を込めて語られている。葡萄園を持つ人に二人の息子がいて、葡萄園に行き働いてくれという要請に対して一人目の息子は一旦断るが、後に考え直して出かけて入った。それに対して、二人目は同意したものの実際には行かなかった。父親は神を、葡萄園はイスラエルを表しているのは明らかである(詩80:9-12; イザ5:1-7; 27:2-3; マタ21:33-46を参照)⁴⁷。譬え話に付された解釈によると、一人目の息子は義の道を示した洗礼者ヨハネの言葉を信じた徴税人や娼婦たちを、二人目の息子は彼を信じなかったユダヤ人指導者たちのことを象徴している(21:32)⁴⁸。そのために、徴税人や娼婦たちはユダヤ人指導者よりも先に神の国に入ることになる宣言される(21:31)。

「盛大な祝宴の譬え話」(マタ22:1-14)はルカ14:15-23に並行箇所があり、両者の詳細はかなり異なっているもののQ資料に由来すると考えられる⁴⁹。マタイ版の話では、この祝宴は王が王子の婚礼の祝いとして設定している(マタ22:2)。ここには終末時に行われる天上の祝宴のイメージが投影されていると思われる(黙19:7-8; マタ25:10)。祝宴の用意が出来ると王は家来たちを送って招待客を呼びにやっただが、彼らは来ようとはしなかった(22:3-5)。そこで王は家来を再度送って、町の大通りで見かけた者はすべて連れて来たために、婚宴の会場は人で一杯になった(22:8-10)。王は婚宴の客の中に礼服を着ていない者がいるのを見つけて、家来に命じて外の闇に放り出すように命じる(22:11-13)。譬えは「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」という解釈句で結ばれている(22:14)。ルカ版の話と違って、マタイ版では祝宴が王子のために王が開催した婚礼の祝いとなっているが、王は神を王子はイエス・キリストを示唆しており、キリスト論的な関心が強く表れている(マタ22:2)⁵⁰。また、家来が最初に客のところへ呼びに入ったときに、ある者たちは家来たちを虐待して殺害したので、王は怒って軍隊を送り、彼らを滅ぼし、町を焼き払っている(22:7)。この婚宴の祝いとは程遠い残酷なエピソードには、エル

46 Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, 113; Jünger, *Paulus und Jesus*, 164, 167; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 35-36, 41-42; Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 2:181; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:141-142; Hagner, *Matthew*, 2:572; Osborne, *Matthew*, 732を参照。

47 Hultgren, *The Parables of Jesus*, 220-221; Osborne, *Matthew*, 780を参照。

48 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 231-232; Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 2:222; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:211-212; Hagner, *Matthew*, 2:613-615; Osborne, *Matthew*, 781-782; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 331.

49 James M. Robinson / Paul Hoffmann / John S. Kloppenborg eds., *The Critical Edition of Q* (Minneapolis: Fortress, 2000), 432-453; 山田『Q文書』、272-275頁; Donahue, S.J., *The Gospel in Parable*, 93; Hagner, *Matthew*, 2:627を参照。

50 Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 190; Donahue, S.J., *The Gospel in Parable*, 94.

サレムのユダヤ人当局によるキリスト教迫害の記憶と（使8:1-3）、後に起こったユダヤ戦争時のエルサレム陥落の出来事の記憶（マタ23:37-39; ルカ13:34-35）が反映されているのであろう⁵¹。この譬え話自体はQ教団に由来するが、マタイはそれを歴史的記憶に従って再解釈したのであった。他方、礼服を着ていないものが排除されるくだりでは、祝宴に参列することが究極的救いに与ることを、礼服を着用することが主の御心に従って福音に相応しい生き方を送ることを象徴している⁵²。

マタイ福音書24章後半と25章においては5つの譬え話が収録されている（マタ24:36-44, 45-51; 25:1-13, 14-30, 31-46）。これらはすべてイエスが弟子たちに対して語った終末の到来についての講話の中に出て来ており、終末を迎える者の心構えについての教えの一環をなしている（24:1-25:46）。資料的に言えば、Q資料から採られたものと（マタ24:36-44, 45-51; 25:14-30）、マタイ特殊資料から採られたものがある（マタ25:1-13, 31-46）。

マタイ24章後半には、終末における主の来臨を望みつつ目覚めていることを勧める二つの譬え話が記されている（マタ24:36-44, 45-51）。福音書記者マタイは、「その日、その時は誰も知らない」という導入句の後に（マタ24:36; マコ13:32）、「ノアの洪水の例話」を（マタ24:37-41; ルカ17:26-27）引用し、「目を覚ましていなさい。あなたがたの主が何時来られるのか、あなた方は知らないからだ」という導入句（マタ24:42; マコ13:35）の後に、「泥棒の襲来の譬え」（マタ24:43-44; ルカ12:39-40）を引用している。この譬え話の結びの句は（マタ24:44）、終末時における人の子の来臨が予告なしに起こるという認識に立って（Iテサ5:2-4; 黙3:3を参照）、何時来ても良いように常に備えているようと勧めている。

「忠実な僕と悪い僕の譬え話」は（マタ24:45-51）、ルカ12:42-47に並行箇所があり、Q資料から採録されている⁵³。マタイ版の話の文言は（マタ24:45-51）、マタイが好んで用いる言い回しを用いた結びの句（24:51を8:12; 13:42, 50; 22:13; 25:30と比較せよ）以外は、ルカ12:42-47とほぼ一致している。この譬え話のポイントは、主が来臨する時が遅延していることを前提に、終末期待が弛緩し、他の僕たちに対して非倫理的な振る舞いをすることを戒めることである。この譬え話は史的イエスではなく、終末の遅延の問題に直面していた教会に由来するものであろう⁵⁴。この譬え話は、終末の裁きの場面を描いており（特に、マタ24:50-51; ルカ12:46-47）、黙示的な内容を持っている。しかし、「忠実で、賢い僕の振る舞いと悪い僕の行動が対照され（特に、マタ24:50-51; ルカ12:46-47）、前者が称揚されている。賢い者の行動と愚かな者の行動が対比され、賢くなるように読者に勧めることは知恵文学に見られる典型的な語り方であるが（箴3:35; 10:8, 23; 12:15-16, 23; 13:16を参照）、マタイは倫理的勧告の言葉だけでなく（マタ7:24-27）、譬え話にも用いている（マタ 25:1-13, 14-30, 31-46他）。黙示文学も知恵文学的内容を含むことがあり、

51 Linnemann, *Gleichnisse Jesu*, 93; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 190-191; Harnish, *Die Gleichniserzählungen Jesu*, 233; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:242; Davies / Allison, *Saint Matthew*, 3:201; Hagner, *Matthew*, 2:630; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 345を参照。

52 Linnemann, *Gleichnisse Jesu*, 93-94; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:245; Hagner, *Matthew*, 2:631; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 347-348を参照。

53 Robinson / Hoffmann / Kloppenborg eds., *The Critical Edition of Q*, 366-375; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:459; 山田『Q文書』、254-256頁を参照。

54 Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 2:345; Davies / Allison, *Saint Matthew*, 3:389; Hagner, *Matthew*, 2:725.

黙示的であることと知恵文学的であることとは必ずしも相互に矛盾はしない。

マタイ福音書25章には終末の到来に関する3つの譬え話が収録されている（マタ25:1-13, 14-30, 31-46）。「十人の乙女の譬え話」（マタ25:1-13）には並行箇所がなく、マタイ特殊資料から採られたものである。場面は婚礼であり、夜に花婿が到着するのを十人の乙女が灯りを点して迎えることになっている。花婿の到着は夕刻であるが具体的時刻ははっきり決まっていない。乙女たちは灯りを点して花婿の到着を待つ。賢い乙女は灯火に加えて油壺を用意するが、愚かな乙女は用意していなかった（25:2-4）。真夜中に花婿が到着した時に、賢い乙女たちは予備の油を用意していたので灯火を点して花婿を迎えることが出来たが、愚かな乙女たちが油を買いに行っている間に花婿が到着し、婚礼が始まって戸が閉められてしまった（25:8-10）。この譬え話は、「だから、目を覚ましていなさい。あなた方はその日その時を知らないのだ」という教訓で閉じられている（25:13）。この話はマタイ共同体が直面していた終末の遅延の問題を取り扱っている。花婿は再臨のキリストのことを指しているが、その到来の時を誰も知らない（マタ24:36, 42; Iテサ5:1-2を参照）⁵⁵。その時が何時であろうとも常に備えていることが「目を覚ましている」ことの具体的な意味であろう（マタ25:13; さらに、24:42を参照）。譬え話の中で賢い乙女たちは灯火に加えて油が入った壺を用意しているが、これはキリストの再臨まで少し時間があることを前提にしている。キリストの来臨は遅れることがあっても必ず来るのだから（IIペト3:8-10）、賢く用意周到に備えていることの大切さを強調している⁵⁶。賢い者と愚かな者を対照し、賢い者となるように勧めることは先に見たように知恵文学的である。

「タラントンの譬え話」（マタ25:14-30）はルカ19:11-27に並行箇所があり、Q資料から採られていると考えられる⁵⁷。マタイ版の話ではある人が旅に出るときに、僕たちの能力に応じて、それぞれ、5タラントン、2タラントン、1タラントンのお金を預けた（25:14-15）。5タラントン預けられた僕と、2タラントン預けられた僕は、預けられた金額を元手として商売し、それぞれ5タラントンと2タラントンを稼いだ（25:16-17）。ところが、1タラントンを預けられた僕はそれを土に埋めて隠しておいた（25:18）。主人が旅から帰って来て清算を行い、5タラントン預けられた僕と、2タラントン預けられた僕は、忠実な良い僕として褒められるが、1タラントンを預けられた僕は叱られ、1タラントンは取り上げられて、10タラントンを持つようになった僕に渡された（25:19-28）。さらに、この僕は役に立たない僕として外の闇に投げ出されることとなる（25:30）。ルカ版の話では預けられたお金の単位がムナ（=100ドラクマ）であるのに対して、マタイ版の話ではタラントン（=6000ドラクマ）と高額であるので、話が非常に誇張されている⁵⁸。この譬え話はマタイ福音書の文脈では、終末の到来についてのイエスの講話

55 Linnemann, *Gleichnisse Jesu*, 125-126; Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 2:352; Davies / Allison, *Saint Matthew*, 3:392; Hagner, *Matthew*, 2:728; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:473, 475, 477; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 382-383を参照。

56 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 146, 172; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 245, 248-249; Hultgren, *The Parables of Jesus*, 176-177.

57 Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 2:356; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 386; Robinson / Hoffmann / Kloppenborg eds., *The Critical Edition of Q*, 524-557; 山田『Q文書』、397-399頁を参照。

58 Hultgren, *The Parables of Jesus: A Commentary*, 274-275.

の中に出て来ており、主人の帰還は復活・昇天したキリストの来臨を指している (24:29-31; 25:31を参照)⁵⁹。福音が全世界に宣べ伝えられてから終わりが来るのであるから (24:14)、預けられたタラントンはキリストの福音を伝えるために与えられた賜物である能力を (ロマ12:3-8; Iコリ12:4-11を参照)、それを用いて商売することは宣教活動を行うこと意味している⁶⁰。すると、この譬えは終末を待つ期間に積極的に宣教活動を行い、回心者を得ることを勧めていることになる。

「王の裁きの譬え話」(マタ25:31-46)はマタイ福音書に固有な譬え話であり、マタイ特殊資料から採られている。「人の子」と呼ばれるキリストが栄光に包まれて天使たちの共に到来する (25:31)。王なるキリストは、羊飼いが羊を分けるように、人々を右と左に分ける (25:32-33)。右側にいる者たちは、褒められて国を受け継ぐように勧められる (25:34)、それに対して左側にいる者たちは断罪され、悪魔とその手下のために用意した永遠の火に入るように命じられる (25:41)。この扱いの違いは、裁きを受ける者たちがその生涯の中で、キリストが飢えているときに食べさせ、渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸の時に着せ、病気の時に見舞い、獄中にあったときに訪ねたかどうかである (25:35-36, 42-43)。こう告げられた者たちはそのようなことを行った自覚がなかったが、王なるキリストは、「アーメン、私はあなた方に言う。これら最も小さい私の兄弟の一人にしたのは、私に対して行ったのである」と告げている (25:40; さらに、25:45を参照)。この文脈では、「これら最も小さい私の兄弟の一人」とは、特にマタイ共同体の信徒たちのでも宣教に従事する者たちを指している⁶¹。マタイ福音書では信徒が「小さい者」と呼ばれることがある (10:42; 18:10)。特に、「小さい者」と呼ばれる宣教者を受け入れて助ける者には終末の報いを約束する言葉もあるので (10:42)、この譬え話も様々な苦難の中にあるマタイ共同体の宣教者たちを助ける者に終末の祝福を約束し、そうしない者たちを断罪していることとなる⁶²。この譬え話はマタイ共同体が、困難な宣教活動を続けながら、終末の到来の展望の中で生み出して伝えた言葉であり、非常に黙示文学的な色彩が強い。

5. まとめと展望

マタイ福音書の釈義的研究から、マタイ福音書中の譬えについて、次のことが確認できる。

(1) マタイ福音書は他の福音書に増して「天国は・・・のようなものである」という定型句や (マタ13:31, 33, 44, 47, 52; 20:1)、「天国は・・・に譬えられる」という定型句で (マタ13:24; 18:23; 22:2; 25:1) 譬え話を導入することが多い。マタイはこのことは福音書記者マタイが譬えの本質を天国の到来のメタファーと理解していることを示している⁶³。

(2) マタイ福音書の降誕物語には旧約預言が引用されている (マタ1:23=イザ7:14; マタ2:6=ミカ:1, 23;

59 Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 146-147; Weder, *Die Gleichnisse Jesu als Metaphern*, 194, 208; Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 2:362; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:506, 510; Osborne, *Matthew*, 920, 923.

60 Hagner, *Matthew*, 2:737; Osborne, *Matthew*, 924; Konradt, *Das Evangelium nach Matthäus*, 386.

61 Gnllka, *Das Matthäusevangelium*, 2:375; Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:537-539; Osborne, *Matthew*, 937.

62 Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 3:542.

63 Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 2:367-368.

マタ2:18=エレ31:15; 創35:19)。それはマタイがイエスの誕生の出来事を預言の成就と考えているからである（マタ1:22を参照）。旧約預言は詩文であり、メタファーが沢山使用されている。マタイはメシア預言を示すメタファーを引用して、イエスの誕生の意味を強く印象付けようとしている。

(3) マタイ福音書における譬えには知恵文学的性格を持ったものが多くある。マタイ7章には譬えが沢山出て来るが、その中には、「狭い門から入る譬え」(7:13-14) や、「良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ譬え」(7:17-18) や、「地上ではなく、天に富を積む譬え」(7:19-12) や、「岩の上に家を建てる譬え」(7:24-27) は、二つの対照的な行動の可能性を示してその片方を選択するように迫っており、知恵文学によく見られる語り方をしている（箴2:7-15; 2:21-22を参照）。

(4) マタイ福音書は教会論的関心が強く、「仲間を赦さない家来の譬え話」(18:23-35) を引用して信仰の兄弟たちの罪を赦すことを勧めると共に、罪を犯す信徒たちへの配慮を語る文脈で、「迷った羊の譬え話」(18:12-14) を引用して、罪を犯して迷い出た信徒を見つけ出して教会の交わりに連れ戻す努力をするように勧めている。

(5) マタイ福音書には終末の到来に関する譬えが多く収録されている⁶⁴。「毒麦の譬え話」(13:24-30)、「漁獲の譬え話」(13:47-50) は天使を通しての終末の裁きを主題にしており黙示的性格が強い。「十人の乙女の譬え話」(マタ25:1-13)、「タラントンの譬え話」(マタ25:14-30)、「王の裁きの譬え話」(マタ25:31-46) はイエスが弟子たちに対して語った終末の到来についての講話の中に出て来ており、終末を迎える者の心構えについての教えの一環をなしている (24:1-25:46)。「タラントンの譬え話」(マタ25:14-30) Q資料から採られているが（ルカ19:11-27を参照）、他はすべてマタイ特殊資料から採られたマタイ固有の譬えであり、マタイ共同体に黙示的思考が強いことを示している。

(はらぐち・たかあき)

フェリス女学院大学国際交流学部元教授

64 Luz, *Das Evangelium nach Matthäus*, 2:374-375.